

ウェブサイト作成を通じた文章作成指導の可能性

Possibility of writing guidance through the Website creation

小笠原 拓 OGASAWARA Taku (准教授 学習科学講座)

キーワード：地域教育ゼミ community education seminar、ウェブサイト作成 website creation、文章作成指導 writing guidance、ライティング・ワークショップ writing workshop、一・五次的ことば 1.5-dimensional language

はじめに

大学生活において、「書く力」は極めて重要である。殊に本学科のような文系の教科が多くを占めるカリキュラムにおいては、多くの場合、レポートによって成績評価が行われる。更に研究発表や文献購読などを行う際にレジюмеやハンドアウトを作成する機会も多い。しかし学生達自身は、自らの「書く力」にあまり自信をもっていないように見受けられる。

後に詳しく述べるように、近年は、学生の文章作成能力を強化するようなプログラムに力を入れる大学も多く、本学においても、レポート作成等に苦手意識をもつ学生に対する個別支援プログラムが実施されている。しかし、果たしてそういったプログラムは学生達の「書く力」を本質的に高めることに繋がっているのだろうか。筆者自身は、それらのプログラムの意義を認めつつも、その効果については、やや懐疑的である。

そこで、昨年度より「地域教育ゼミⅢ・Ⅳ」において、いくつか偶発的な事柄が重なった結果ではあるが、学生を主体とした、ささやかな取り組みを行なった。本稿は、その経過について報告し、その取り組みが有する可能性について、具体的な成果を踏まえて検討を行うものである。

1 研究動機とその背景

(1) 大学生に求められる「書く力」

冒頭にも述べたように、大学生の「書く力」の不足については、大学の内外において様々な議論が行われている。主にアメリカの影響から、「ここ10年間で、大学初年時課程にレポート・論文の指導を組み込む大学が著しく増えた」という指摘もあり¹⁾、その背景には、指導教員による卒業指導論文だけでは、大学における学生の十全な学びを保証することができないという意識があると考えられる。

しかし、このような状況を単に、所謂「学力低下」問題の一つとして論じるのは、単純化の誹りを免れないであろう。近年は、文部科学省を中心に大学入試改革の議論が本

格化しつつあるが、そこでも「記述式」問題の導入が大きな話題となっている²⁾。即ち、そもそも社会的な要請において「文章を書くこと」がより多様な場面で求められており、そのことが様々な場面における評価と直結するような社会状況の変化を見逃すことはできない。大学においては、その変化がより急速に起こってきており、そのことが先に述べたような対策を講じる姿勢へ繋がっていると考えられる。この点について、本学の現状を踏まえ実践的に研究を深める必要があると考えたことが、本研究の主たる動機である。

(2) メディア環境の変容

但し、その際に一つ注意しておく必要がある。それは学生たちを取り巻くメディア環境の変化である。まず学生達自身の状況について言えば、10年前の学生とは全く異なるメディア環境を彼らは生きており、それに伴う様々な情報ツールを使いこなすことを前提として学生生活を送っている。例えば学生にとってLINEを始めとするSNSサービスを使いこなすのは、当然の「能力」であるが、そういったサービスは、10年前には存在もしなかった。当然、これまでに身につけてきた「書く力」も以前の学生とは異なっており、そのこと意識して学生指導を行っていく必要がある³⁾。一方、写真や動画を用いた表現がこれまでとは比較にならないほど一般化するなど、メディア環境の変化によって「書くこと」領域が拡張され、それらを扱う「能力」が社会的に求められているという現実も見逃すことはできない。メディア環境の変化が、学生と社会の双方が求める「書くこと」能力に大きな影響を与えていることを踏まえ、新たな指導のあり方を検討する必要がある。

(3) 少人数ゼミの運営をめぐる課題

もう一つの背景として、筆者が所属する鳥取大学地域学部地域教育学科の指導体制がある。国立大学の特徴の一つとして、私立大学と比較して学生数に対する教員数の多さを挙げることができる。このことは、学生達にきめ細かい指導を行う上で非常に優位な条件と言える。しかし逆に言えば、この少人数を生かした指導、中でもゼミの運営が学生指導において大きなウェイトを占めることを意味しても

いる。特に本学科の場合、2年次より週1回「地域教育ゼミ」が実施され、更に「地域調査実習（地域教育）」などの授業で少人数を基盤としたゼミ活動が行われている。これらの授業の成否が学生指導に与える影響は大であるが、特に「地域教育ゼミ」については、後述するように課題も少なくない。そこで本研究では、この「地域教育ゼミ」（特にⅢとⅣ）の時間を用いて行うことのできる、効果的な文章作成指導の実践について検討を行うことにする。

2 「地域教育ゼミ」の内容と学生の実態

（1）本学科必修科目「地域教育ゼミ」の内容と課題

本学科内部の人々にとっては周知の事実かもしれないが、研究室によって運営の仕方も多少異なるようなので、「地域教育ゼミ（特にⅢ～Ⅳ）」の授業内容と目的について、改めて確認しておきたい。「地域教育ゼミ」は地域教育学科の中核をなす必修科目であり、2年生の前期から4年生の前期まで半期ごとに各2単位ずつ開設されている。学科における学習内容を、自らの興味関心に沿って選択しながらゼミ形式で学んでいくとともに、最終的には、卒業論文で所属する研究室を決定し、卒業研究のテーマを構築していく手掛かりとなる授業である。

筆者が所属する学習科学講座では、2年前期の「地域教育ゼミⅠ」は講座で一つのゼミ（教育実践ゼミ）を開設し、附属学校への授業参観とその後のディスカッションを組み合わせた授業が行われている。続いて2年後期の「地域教育ゼミⅡ」では、「社会・言語・家庭科ゼミ」「理科・数学・ものづくりゼミ」「体育・音楽・美術ゼミ」の三つのゼミが開設されており、研究内容の特性に合わせた形でゼミ運営が行われている。即ち前期は、「学校現場の実態をどのように見取るか」という課題意識をもって、授業参観とディスカッションを繰り返しながら「学び」に対する観察と分析の方法を学ぶのに対し、後期は、より「学ぶ内容」の特質に合わせて、それぞれの学習対象をどのように研究し深めていけばよいかについて、より直接的なかたちで手ほどきを受けることになる。前期が教員志望を始めとする「教育現場に一定の関心をもつ学生」に向けられた授業内容となっているのに対し、後期は教科内容を絞り、自らの興味関心を深める学習が行われることが期待されている。

一方、「地域教育ゼミⅢ・Ⅳ」は、原則として卒業研究におけるゼミの配属を前提として進められている。学習科学講座においては、特殊な事例を除いて、「地域教育ゼミⅢ」の段階で配属が決定した研究室において卒業研究を行うことになる。今年度の場合、学生たちは2年次の1月頃から研究室訪問を実施し、希望する研究室のゼミおよび卒業研究の内容などについてレクチャーを受け、その後、2月に研究室希望届を提出する。配属人数によって若干の調整が行われ、3月頃、最終的にゼミの配属が決定される。

学習科学講座では、先にも述べたように、研究内容の性格上、3年次の段階で他の研究室と共同的なゼミを全面的に行うことは難しく、中間発表やそれに伴うコンパなどのリクリエーション活動を除いては、原則として研究室ごとにゼミが実施されている。このことには賛否両論があるが、少数であっても、学生がある程度安定して所属している場合、先輩後輩の縦の関係が作りやすく、効果的な指導に繋がるのではないかと感じている。

一方で、当然ながら問題もある。まず3年次のゼミ所属については、その年の学生の性格に左右されることが多く、次年度の予定を立てることが難しい。数年前までは、最終的な所属ゼミの決定は、3年次の4月になるまで不明で、学生の所属が決まってからゼミの内容を決める必要があった。近年はゼミ決定の方法に改善が見られ、その時期が多少早まりつつあるが、前年度の状況と次の年とが大きく変わる可能性が常にあるという点は変わっていない。従って、例年ゼミで行う内容を変更せざるを得ない部分が大きく、結果として、「研究室の文化」のようなものが醸成しきれていないというジレンマを抱えている。

（2）2014年度「地域教育ゼミⅢ・Ⅳ」について

以上のようなことから、本研究室では、地域教育ゼミ（Ⅲ）（Ⅳ）について以下の三つの目的を意識して進めることを基本方針としている。

- ① 卒業論文作成に向けた学生の興味関心の醸成
- ② 論文作成のために必要なスキル（調査、論文読解、文章作成）の向上
- ③ ゼミ活動による人間関係の構築（居場所づくり）

確かに2年次の地域教育ゼミである程度の専門性に触れてはいるものの、まだ2年次の学習を終えたばかりであり、それまでほとんど国語教育の専門的な内容に触れたことがない学生が所属する場合もある。まずは、国語教育に関わる様々な事象に触れるとともに、それらと自身の興味関心を関連づけて考えさせ、卒業論文作成に向けて、学生の興味関心を醸成することが第一の目的となっている。

第2の目的として、調査・論文読解・文章作成など、卒業論文作成に必要なスキルの向上が挙げられる。但し、これも学生の状況を考慮し、いきなり専門的な論文を読ませたり議論させたりするというのではなく、国語教育に関わる様々な事象に触れる中で、そういったスキルを伸ばしていくという姿勢で進めている。

第3の目的として意識しているのが、学生の居場所づくりである。学生は部活動やサークル、アルバイトなど様々な居場所を個々にもってはいる。但しそれは学習とは直接かかわりはない。大学に通う動機づけとして、学習仲間の中に居場所を構築し、共に学ぶことの楽しさを意識させるということも、このゼミの目的である。

これまでは、前期は国語教材の対象となるものを話題に取り上げながら学生の興味関心を探る活動を中心に、後期に入って、特定のテキストを決めて講読活動を行ったり、そこから発展した読書会活動（ブッククラブ）を実施したりしながら、上記の①～③の目的を達成できるよう授業運営を行ってきた。特に2013年度については、それまでにない方法で「ブッククラブ」を実施して手ごたえを感じていたため⁴⁾、翌年も同様に進めて行こうと2014年の始めには考えていた。

しかし、ゼミに所属した3名の学生と何度か話をしてみると、個々の性格や資質だけでなくメンバー相互の関係も昨年度とは異なっており、同様の活動を行ってもよい成果が表れないのではないか、という危惧をもった。これは特段どちらかの学年が優れているといったことではなく、キャラクターや関係性の違いである。具体的に言うと、2013年度の3年生は、ゼミを選択した時点で、メンバー4名が比較的親しい間柄であり、無論、個々に親しさに違いはあるものの、親密になっていくことを相互に最初から望んでいたような素地が存在していた。また4人の中に比較的読書好きの学生が何名かおり、「読書を通じて人間関係を深めていく」という営みを違和感なく受け入れることができるメンバー構成であった。4名がすべて同性（女性）であったということも、その流れを強化する方向に働いていた。

一方、2014年度の3年生は、私の個人的な印象では、前年度とは異なる印象をあたえるメンバー構成であった。具体的には、男子2名、女1名の3名で構成され、ゼミ決定時点でお互いに面識はあったものの、お互いの関係はそれほど深いものではなかったようである。3名とも中学もしくは高校の免許取得を希望しており、うち2名（いずれも男子）は、中学校の教員を志望していた。女子1名については、高校の免許を志望しているものの、進路については教員以外を想定していた。授業履修もあまり重なっておらず、筆者の授業を同時に履修したのは3年次の後期（「国語学習内容学研究」）になってからである。他の授業では同時に履修した者もあったのかもしれないが、相互に親しい関係にあったという訳ではなかったようであった。

ゼミを開始して相互の興味関心を探るためいくつか課題を課したが、「読書」というキーワードで3人を結びつけるのは、やや困難であると改めて感じた。偶然にも3人はかなり重度の「マンガ好き」という共通点をもっていたが、マンガだけで読書会を進めるのは（1度や2度はよいかもしれないが）、深い学習に繋がるかどうかという点で疑問が残った。何より、普段の生活がやや「内向き」で、大学2年生にしては「閉じられた関係性の中で生活を完結させている」という印象を3人から共通して受けた。それぞれしっかりと自分の世界をもっているものの、それらを相互に交流し合うような姿勢は当初はあまり見られなかった。そこで、方針を変更し、昨年度とは異なる活動によって3年次のゼミを進めることにした。

3 なぜウェブサイト作成に着目したか

(1) 「（おもしろ）読み物サイト」というジャンル

そのような状況において設定したのが、ゼミ生による「ウェブサイト作成」という課題であった。ただし、最初からこのような課題を用意していた訳では無い。いくつかの伏線と背景があり、結果として「ウェブサイト作成」に落ち着いたというのが現実である。本節では、その背景について、「ウェブサイト作成」という課題の側から概説する。

そもそも、筆者は数年前より「（おもしろ）読み物サイト」と呼ばれる、ウェブサイト上の一ジャンルに着目していた。一般に、インターネット上のウェブサイトと言うと、即時性・速報性（yahoo トップページに代表されるようなニュースサイト）や網羅性（ウィキペディアのような百科事典的サイト）更には双方向性（Twitter や Facebook のような SNS サイト）といった観点から語られることが多い。つまり書かれている内容の興味深さや質ではなく、メディアとしての利便性や簡易性などのほうに、しばしば多くの注意が向けられる。

しかし純粋に「読み物」で楽しませるようなサイトもあり、一定の存在感をもっている。その代表的なものが、「デイリーポータルZ（DPZ）」⁵⁾で、日本における所謂「（おもしろ）読み物サイト」の老舗のような存在のサイトである。有力なインターネットプロバイダでもあるニフィティ株式会社の名物社員であった林雄二氏を中心に2002年に立ち上げられたサイトで、現在はニフィティの業務の一部として同社のインターネットプロバイダサイトのトップページにもリンクが張られている。サイトの紹介欄には、次のような言葉が掲げられている。

デイリーポータルZは無料の娯楽サイトです。面白い場所を見つかったり、こんなことしたら面白いに違いないと思ったアイデアを実際に試したりしています。アイデアは身近でお金をかけないものばかりです。常識にとらわれず驚くようなことも実践しますが、わたしたちは面白いに違いないという確信を持ってチャレンジしています（ときどき失敗もしますがそれも正直に書いています）。あまり面白いと言われないものでも、こう見てみると面白いという見かたを発見するのも大好きです⁶⁾。

同じページの中では、「これまで評判の良かった記事」として「納豆を一万回混ぜる」「糸電話で市外通話」「デカイ煙草の箱」「青くする実験」などユニークな記事が紹介されている。現在、Twitter のフォロワーは4万人以上、Facebook の「いいね！」は1万人以上を集め、同サイトの記事がきっかけとなってウェブサイト上に話題が広がったり、マスメディアにも頻繁に取り上げられたりしている。

記事のタイトルを見ても分かるように、このサイトの特徴は、「役に立つ」ことから徹底的に背を向けて、「面白さ」を追究しそれをウェブページ形式の記事によって発信しているという点である。先ほど述べたような利便性とはほとんど関わりがなく、純粹に書き手が「面白いこと」のみを記事にし、話題を集めている。冒頭に挙げたようなインターネットサービスサイトとは一線を画したものと言えよう。このサイトの手法を授業への利用することが可能であるかを考えたことが、「サイト作成」活動へ繋がる第一歩であった。

(2) 地域をテーマとしたサイト作り

「ウェブサイト作成」の可能性を考えるようになったもう一つのきっかけは、先述のデイリーポータルZ等をきっかけとして、多くの「地域」をテーマとしたウェブサイトの存在に気づくようになったからである。

例えば、「沖縄B級ポータル -DEEokinawa (でいーおきなわ)」⁷⁾、「長崎ガイド」⁸⁾「はまれぼ.com」⁹⁾「Concent 高円寺」¹⁰⁾などを挙げるができる。いずれも個人および小規模の団体によって運営されている「地域」をテーマとしたサイトであり、どちらかといえば、先に紹介したデイリーポータルZ同様、(サイトによって多少の違いはあるものの)「利便性」よりも「おもしろさ」を優先するような内容となっている。結果として、大手のポータルサイトやニュースサイトとは異なる「個性的」な記事が多く掲載されており、それぞれの地域の魅力を効果的に紹介するものとなっている。

ここから推察されるのは、ウェブサイトと呼ばれるメディアが、従来考えられている以上に、「地域」というテーマと相性がよく、全世界を相手にするようなものだけでなく、中規模なコミュニティを相互に繋ぐような機能も有しているのではないかということである。さらに付け加えるなら、そのような「地域」を表現する際には、即時性や網羅性を意識した無味乾燥な内容よりも、個人や小集団の目から見た「個性的な」内容の方がより魅力的であり、効果的なのではないかということも指摘することができる。

このような手法は近年、大学の広報活動でも利用されており、その事例の一つとして、東京農業大学が運営している「多摩川源流大学」¹¹⁾を挙げるができる。そもそも「多摩川源流大学」とは2007年5月に山梨県小菅村の旧・小菅小学校白沢分校を利用して「開校」された東京農業大学による体験型人材育成プログラムである。同大学が推進する地域再生プログラムの一つとして活動が行われてきたが¹²⁾、2014年頃からプロのフリーライターである地主恵亮氏を非常勤講師に迎えるなどしてウェブサイトの運営の内容を一新し、魅力的な広報活動を行っている。地主氏以外にも、同大学職員の方々や学生によって魅力的な記事が数多く投稿されており、農業や林業と言ったものからは縁遠い筆者のような人間にも、興味や親しみを感じさせるユニークなページとなっている。この「多摩川源流大学」の

活動を知り、その内容を読んでいく中で、ウェブサイト作成が学生にとって有意義な課題になるのではないかと考えるようになったのである。

4 ウェブサイト作成までの過程

(1) 準備期間

ここからは、どのような形でウェブサイトの開設を進めて行ったかについて具体的に述べていく。

2で述べたように「地域教育ゼミⅢ」を開始した当初、学生の様子を見ながら、前年度とは異なる活動を主に行っていこうと考えるようになった。しかし、この時点では、ウェブサイト作成を活動として組み込むうとは考えていなかった。読むことや書くことを積極的に行って学生たちの経験値を高めることを第一に考えていた。

中でも気になったのは、これも既に2で述べたように、学生たちの生活がやや「内向き」で自分の殻に閉じこもりがち印象をもった点である。とはいえ、3名の学生が所謂「引きこもり」的な傾向をもっていた訳では無い。むしろ部活動や趣味など自分の世界をしっかりともち、学業以外にも充実した学生生活を送っている印象であった。ただ、「それ以上のこと」を自ら企てたり、他人を自分の領域に巻き込んだりするような傾向は、ほとんど見られなかった。

例えば、あるゼミの回に、「今日大学に来て、これまで何人と話したか？」という質問をした際、学生たちの反応が印象的だった。最近の学生に限ったことではないのかも知れないが、筆者の見限り、たとえ同じ授業を受けていても、学生たちは普段話している相手以外には、あえてコミュニケーションをとろうとしない傾向がある。そのことを不思議に思っているということを学生たちにぶつけてみると、学生自身、自分たちが思った以上に積極的に他人と関わっていないことに驚き、自分たちの生活に足りないものがあると感じたようであった。さらに学生たちに普通の生活についていくつか質問してみると、確かに趣味や部活動などにしっかりと取り組んでいるものの、その生活のリズムがやや単調かもしれないという反応も出てくるようになった。

そこで、学生たちに「先週一週間の間に行った『いつもと違う試み』についてパワーポイントにまとめて紹介すること」という課題を出した。ここで言う、「いつもと違う試み」の内容については、特に制限はしていない。なお、パワーポイントによる発表を義務付けたのは、「スピーチ」では課題性が高まらないことと、学生自身がパワーポイントに苦手意識をもっていたからである。文系の学生は、「文章」で表現することは比較的得意だが、画像や図などを用いて示すということについては過剰なほど苦手意識をもっている。そういった学生たちの苦手意識を払拭するという意図も、この課題には含まれている。

結果として、学生たちは日々の生活を少しずつパワーポイント化して紹介することができるようになった。「初めてフランス料理店でランチを食べた!」「マンガ喫茶&インターネットカフェに潜入する」といった普段やりたいと思っていながらできなかったことに挑戦した報告や、「自分的『枕草子』を書いてみる」のように、普段の「思いつき」を実際にやってみたというもの等、バラエティ豊かな発表が毎週行われた。結果として、お互いの趣味や嗜好性を知るきっかけともなり、学生相互の関係も深まっている印象をもった。

(2) サイト公開までの流れ

そんな中、ある学生が行った「『鳥取版いろはうた』を作る」というプレゼンが、学生同士に大きな刺激を与えることになった。あるお笑い芸人の「オリジナルいろは歌を作る」というネタに触発され、自分自身でも試してみた顛末を紹介したものであったが、内容だけでなくまとめ方も工夫がなされており、何らかの形で外に紹介しても、十分「ウケる」と感じさせるものであった¹³⁾。

そこで、発表を行った学生に、「これを文章化したらウェブサイトの魅力的な記事になるのではないか？」と投げかけてみた。更に、先に紹介した「デイリーポータルZ」や「多摩川源流大学」の事例をモデルとして紹介した。いきなりこれらのサイトを提示しても、おそらく学生たちは「自分たちにできるのか？」という疑問が先に立って、自ら行動を起こすことは難しかったかもしれない。しかし、学生たちは、既に何度もプレゼンを行い、それらを文章化することによって、魅力的なコンテンツを生み出すことができるかもしれないという手ごたえを感じつつあった。学生たちはいずれも積極的な姿勢を見せ、ある学生などは、自分でウェブサイト作成の方法について調べ、パワーポイントを用いて、発表してくれた。

そこで、課題を「パワーポイントによる発表」から「ウェブ形式の記事による発表」に切り替え、ゼミ活動を進めていくことにした。具体的には、Word(ワープロソフト)を用いて記事を作成し、それをウェブページ形式に変換させることで、一種の「ウェブサイトもどき」の画面を作成させ、ゼミで発表させることにした。筆者自身もHTML形式のウェブサイト作成の方法について、多少なりとも学習し、学生たちが書いてきた記事をパソコンの画面上にブラウザソフトを用いて表示する(この段階では当然ネット上には公開されていない)等して、「ウェブサイト作成」に対する興味関心や達成感をもたせるよう工夫した。

その後、題材探しや記事の書き方に習熟していった学生たちは、順調に記事数を増やしていった。そこで、学生たちには、「もし記事が10~15本程度集まったら、本当にサイトを作って記事をネット上に公開してみようと思うのだが」と提案した。既に記事作成に慣れ、勢いづいていた学生たちは、その提案を積極的に受け入れ、新たな記事を作成していった。

その間、筆者自身はウェブサイト作成のための知識を別に学び、少しずつ準備を進めていた。実は、この時点において、筆者は、ホームページはおろかブログもSNSサイト(TwitterやFacebookなど)のアカウントももっておらず、ウェブサイト作成については、ほぼ素人同然であった。このことが、その後の指導に大きな意味をもつのだが、その点については後で触れる。

そこでまず、「sandvox」という比較的安価かつ使いやすくとされるウェブページ作成用のアプリケーションの使い方を学び、同時にレンタルサーバーを用いたウェブサイト公開の方法について学ぶことになった。ウェブサイトの公開については、大学の設備を利用することも考えたが、何らかのトラブルが起こった際に責任が広範囲に及ぶ可能性を考慮して、私費でウェブサーバーを借りて運営することにした。

5 ネットへの公開とその後の状況

(1) ウェブサイトの公開と記事の執筆状況

「地域教育ゼミIV」が終わる2月の段階で、12本の記事が集まった。今後も学生たちは記事を書き続けることができそうだという手応えをもつことができたので、正式にウェブサイト上に記事を公開することにした。サイトの構成については、3で紹介したようなサイトを参考に、筆者がサイトの全体像を作成した。またタイトルについては、学生たちに考えさせる予定であったが、仮のタイトルとして筆者が挙げたものを学生たちが気に入り、結局、現在まで変更はしていない。このような経緯を経て2015年4月、ウェブサイト「腸感冒は方言です(仮)!?」¹⁴⁾を正式に公開した。以後、約1週間に1本のペースで記事を発表し、2016年3月2日現在、51本の記事が公開されている。

4月以降は新3年生(2015年度は1名)と大学院生(1名、2013年度に読書会を行っていたメンバー)を加え、そこに筆者も加わって交代で記事を書いている。とはいえ、サイトの性格上、強制するようなものではないので、学生たちの状況や活動内容の進展に合わせて、学生たちが自発的に記事の投稿を行っている。筆者自身も「書き方」を示すという意味合いもあって、1カ月に1本程度の記事を投稿している。ゼミ以外の学生についても、興味をもった学生には、一定の指導を行い、記事を書いてもらうこともある。更に現在では、この活動に興味をもってくれた他学科の教員や事務職員も記事の投稿を行ってくれている。今後も記事の作成については、ゼミという枠組みにとらわれず、投稿を呼びかけていく予定である。

(2) 実際の指導過程—「手引き」を中心に—

学生たちには、「著作権は書き手に、編集権は小笠原(筆者)に」という基本方針を事前に話し、誤字脱字だけでなく、表現が分かりにくい部分や公開する上で相応しくない

表現などについては、ある程度、筆者が編集を行うということを事前に了解させている。その上で、筆者がどこを直したのか、どのように直したのか等について事後にチェックし、その後の表現に生かしてほしいと指示している。また、次のような「手引き」を与えて、執筆の際の指針にしている。

(文章について)

- ・ 2～3行で一段落にすることを意識して書く。
- ・ 段落を変えるときは改行して一行あける。
- ・ 文字の大きさを本文上で変化させるのはアリ。但し、多用し過ぎると、記事の読みやすさがかなり犠牲になるので注意。ここぞ、というときに使うとよい。(あと、作成ソフトの都合上、フォントを変えても、ページに反映しない場合があるのも知っておいてほしい。)
- ・ 同様の理由で、絵文字は現在のところ使わない方がよい(一部のPCでしか表示されないということがある)。また、テキストを使った顔文字についても、先程と同様、使ってもよいが、多用すると逆効果になるので注意(「2ちゃん」ぼくなってしまう?)
- ・ 対象を傷つけたり否定的に表現したりすることは、可能な限り避ける。むしろ少し自虐気味に書くことが他者を傷付けない。
(例)「料理は苦味が強すぎて食べられなかった」(×)
→「ちょっと大人の味過ぎて、味覚が子どもの筆者には、レベルが高すぎた(バカバカ、わたしの舌のバカ!! (泣))」
- ・ 本文には、機械的でもよいので、小見出しは付けた方がよい。あまり一つの話が長くなり過ぎないように気を付けて、全体のバランスを見ながらつける。(1本の記事に3～4の小見出しが付くというのが、バランスが良いらしい。但し、記事の長さなどによって、その辺は当然変化することもある。)
- ・ 「総括」「まとめ」「あとがき」(←小見出しは何でもよいが)のようなものを必ず入れよう。他の部分をうまく受けた形で書けると、記事全体の読後感がアップする。「まとめ」は必ずしも箇条書きである必要はない。むしろ、記事の部分と比較して、一文を長めにした方が、「まとめ感」が出る場合もある。色々な「まとめ方」を工夫してみよう。
(以下略)

紙幅の都合で省略するが、「手引き」には、この他に画像の取り扱いについての注意やファイルの保存の仕方および送信の仕方などについての説明が付されている。これらは、当初から筆者が用意していたものというよりは、学生たちと記事を作成していく中で筆者自身や学生たちが気づいたことをまとめたものである。先にも述べたように、筆者自身、この活動を行うまではウェブサイトの作成については全くの素人だったので、事前にガイドラインをもって

いた訳では無い。あくまでサイト作成を通じて、(勿論、他の様々なサイトを参照しながら)日々正解を探しているというのが実情である。学生たちにも、「ここに掲げている手引きはあくまで『暫定的』なものであるの、自分たちで様々な方法を考えて欲しい」と普段から指導している。

年度が替わって3回生がゼミに加入した際にも、この手引きを記事作成のガイドラインとして読ませ、指導に繋がった。実は2015年度の3回生については、ゼミの所属が1名のみだったため、ゼミに馴染むことができる少し心配をしていたのだが、幸い、ウェブ記事作成を通じて上学年の学生と様々な活動を行ったことで、自然に溶け込むことができた。上学年からのアドバイスや過去の記事を参照することによって、より自然な形で記事作成の手法を身につけていったように見受けられた。

6 サイト作成の効用—学生たちの変容から—

(1) 編集を通じた指導

では、学生たちの様子はどうであったか。彼らが実際に書いた記事などを参照しながら、その変容を通じて、サイト作成活動の効用について考察してみたい。

学生たちに書かせていた記事の長さは、およそ1200字～2400字程度。さらに、一つの記事に5～10枚程度の写真を用いることが一般的である。先にも述べたように、「著作権は学生に、編集権は小笠原に」という原則で、記事作成後は、基本的に指導教員が最終的なチェックを行って記事をサイト上に公開する。その編集過程を通じて、学生たちは、自分たちの文章のどこが不明瞭なのか、どこが説明不足なのかといったことについて、具体的に学ぶことができる。自分たちが実際に書いてきた文章を通じて行われる「添削」は、やはり効果的であり、学生自身の文章に対する感覚を飛躍的に高める効果があった。

例えば、ユーモラスな記事をいくつも書いてくれているM君の場合、サイト作成活動初期においては、書き出しにやや難があった。こういったサイトにおける書き出しは、読み手にとって既知の情報から未知の情報への糸口を示すことで、短い字数で読み手の興味を喚起する必要がある。しかし当初のM君の記事は、その部分がやや冗長であったり、逆に言葉足らずであったりすることが、散見された。例えば、サイト開始当初に持ってきた記事の冒頭は以下のようであった。

聖なる夜、クリスマス…。そんな聖なる夜に我々暇人は暇すぎるので、あるものを作って食べようという話になり集まるのであった。あるものというのはズバリ…からあげである。僕の家では、毎年クリスマスにケンタッキーフライドチキンを食べるので、嬉しいかぎり。

自分とその仲間が、周囲のクリスマスモードに同調できないタイプの学生であり、そのクリスマスモードに抗して突飛な活動を思いついた、という書き出しにしようとしているようなのだが、どうも説明不足である。自分がクリスマスになぜ「暇」なのか？そういう自分たちが「からあげ」を作るのがなぜ楽しいのか？さらにそのことが自分自身とどう関係があるのか？といったことについて、十分に説明が尽くされておらず、読み手はどうしても戸惑わざるを得ない書き出しになっている。そこで実際の記事では、幾つかの点について修正を行った¹⁵⁾。しかし何度かこういった修正を経験した後に同じM君によって書かれた記事は、次のような書き出しで始められている。

急な話になるが、僕は植物が好きだ。だが好きというのもおこがましいくらい知識らしい知識は持っていない。なので植物のちょっとした知識を学びたいと思い、今のゼミに来る前は植物系のゼミに一年間だけ所属していたこともある。そういう理由もあってか、名前だけで衝動買いした小説がある。有川浩さんの作品で『植物図鑑』というもの。（中略）この作品、中身が非常にユニークで、主人公たちが自分で植物を採取してそれを食べるという草食系恋愛小説なのだ。その描写が中々においしそうに描かれていて、食いしん坊の筆者も自分で作ってみたいくなってきたので、小説内で食べられている植物を見つけ、自分で料理してみることにした。

中略した部分については、やや冗長であったため、実際の記事では、若干編集しているものの、それ以外の部分は、ほぼそのままサイトに公開した¹⁶⁾。自分自身が植物に対して興味をもっていたことと、人気小説の内容とをうまく絡め、これから自分がやろうとすることに対して、読者の興味を巧みに喚起する表現となっている。編集作業を通じた指導が、学生の「書く力」の伸長に大きく寄与していることが窺われる。

（２）学生自身による気づき

しかし、さらに筆者自身が驚いたのは、学生が相互に記事を読み合い、写真や表現の工夫を自発的に学んでいった姿であった。当初、ウェブサイト作成に取り組んだ3名の学生のうち1名が卒業論文の中で、自らのウェブサイト作成について取り上げているが、彼は記事の作成過程について次のように述べている。

公開前のものを学生同士で見合うこともあれば、公開されて初めて見ることもある。公開されたのち、自身の書いたものを自分で見ることで、どの点が編集されたか、編集されてどう良くなったかなどを考えることができる。また、自分以外の人が書いたものを見ることができ、自分にはない良さや工夫が施されていれば、

次回自分が書くときの参考にもなる。自分の身近なところに見本があることは、系統的に学習していく際には非常に効果的であると考えられる¹⁷⁾。

作文において教員が「添削」を行ったとしても、それは一時的なものであり、同じようなことを何度も行うことは難しい。そこで学習者自身が、自らの文章表現がもつ特徴や問題点に気づき、様々な表現から学んでいく姿勢が重要となってくる。このサイト作成作業の場合、類似の記事を複数の学習者が何度も書くことによって、お互いの記事についてオープンな形で読み合うことができ、そのことが結果として、自らの表現を見直す機会となっていることが、上記の引用文からも見て取れる。こういった相互交流効果は、作文教育における「文集活動」につながるものであるが、ウェブサイトの場合、記事がよりオープンな形で読めること、また継続した活動が期待されることなどから、より活発な交流に繋がっているのではないかと考えている。

（３）学生相互の関係性の強化

この交流の効果は、単に文章作成能力の向上にとどまらず、学生同士の関係そのものの親密化にも繋がったようである。というのも、初期の記事の多くが、学生個人もしくは学生自身のゼミ以外の友人との共同作業を話題にするものが多かったのに対し、後半になるとゼミ生同士による活動を題材とした記事が多く現れるようになってきたからである。2016年3月2日現在、サイトに公開されている記事の総数は51本であるが、うちゼミ生同士で行った活動を題材にした記事は15本に上る。これらの活動のほとんどは、ゼミにおいて教員が主導したものではなく、むしろ学生たちが「勝手に」思いついて、彼らなりに取り組んだものである。おそらく、教員が知らないだけで、この背後には、記事にならなかった活動も多く存在していたと考えられる。2でも述べたように、ゼミ開始当初は、どちらかというとそれほど親しい間柄ではなく、共通項もそれほど多くなかったメンバーが、ウェブサイト作成を通じてお互いを理解し、自然なかたちで親密さを増していったことが、記事の内容からも窺われる。

既に述べたように、2015年度、筆者のゼミに所属した3年生は1名のみであったため、基本的にゼミは3、4年生合同で行ったが、3年生と4年生との「縦の関係」を構築する上でも、サイト作成活動は有効に機能した。先ほど挙げた15本の中には、3年生が参加した活動も数多く含まれており、そのうちの2編は3年生自身が記事化したものである。今年度より大学院に進学した1名も含め、筆者が特に口を挟まずとも、相互に学習や交流を行う姿が様々な場面で見られ、円滑にゼミ運営を行うことができた。ここにサイト作成活動がもつ、もう一つの効用を見て取ることができる。

7 考察

これまでの議論を踏まえて、今回行ったようなウェブサイト作成が文章作成指導に果たす可能性について、以下の三つの側面から考察してみたい。

(1) 総合的な「書く力」を育てる

まず、本稿で扱ったようなタイプの記事を書かせることを念頭に置いた場合、そこで求められる「書く力」とは、極めて総合的なものであることに改めて気付かされたというを確認しておきたい。

例えば、題材の選択一つをとってみても、かなりの企画力と実行力が要求される。これまで自分が行ったことがない場所や、やったことがないことで、かつ人とは違うユニークな視点をもった活動とは何かをまず考える必要がある。次にそれを仮に思いついたとしても、どのように実行するのかを具体的に考え、そのための方略を練らなくてはならない。一人でできるとは限らないため、他人に声をかけたり、許可を取ったりする必要が出てくる場合もある。

書く内容が定まったとしても、今度はそれをどのように表現するかという問題が出てくる。これは通常の作文と同様であるが、ウェブサイトの場合、メディアとしての特性を否応なく意識させられる。中でも画像（写真）や動画の利用は不可欠である。写真などを効果的に使ってバランスよく記事を配置することはもちろんのことであるが、著作権や肖像権など、どのような画像が掲載を許され、一方どのような画像が許されないかなどについても考えなければならない。

更に、実際に「公開」を前提として記事を書かなければならないということがもたらす問題もある。当然、不特定多数の人の目に触れる可能性を考えて書く必要があると同時に、魅力的な文章とは何かということも改めて考えなければならない。学生たちがお互いの工夫を参考にしながら、自らの表現をブラッシュアップしていったことについては、6でも紹介したが、公開されることを通じて、自らの文章を客観的に捉え、その魅力や問題点を様々な角度から意識し直すきっかけとなっていたことが窺われた。

即ち、ウェブサイト作成において見えてくる「書く力」とは、単なる言語の問題ではなく、発想力・企画力・表現力・編集力など様々な能力を含みこむものであると言える。逆に言えば、学生たちの書く文章の質の高まりは、彼らがウェブサイト作成を通じて、上記に挙げたような総合的な力量を高めていったということを意味している。学生に必要な「書く力」をより総合的に捉え直すことによって、その指導のあり方もまた、検討される必要がある。

(2) 継続的な「ライティング・ワークショップ」のプラットフォームとして

次に指摘しておきたいのは、これも6でも触れたことであるが、この活動が一時的なものではなく継続的なものであったことが、文章作成能力の指導において大きな効果を果たしていた点である。そしてこのような継続的な書くことの指導は、例えば、ラルフ・フレッチャー等による「ライティング・ワークショップ」の考え方に通じるものである。児童文学の作家でもあるフレッチャーとその妻ジョアン・ポータルピは、「書くことは、一つのスキルを学べばそれで終わりということではない」¹⁸⁾ という立場から、教師中心の作文指導に異を唱え、「ライティング・ワークショップ」の実施を提唱し、北米各地で教師等への研修活動を行っている。ライティング・ワークショップについて、彼らは次のように述べている。

ワークショップとは、見習い工が腕の良い職人のそばで働きながら、それぞれの職業に応じた技術を学んでいくという伝統ある制度に基づいています。ライティング・ワークショップも周到に計画された学びの環境であり、それぞれの子どもたちに焦点を当てながらも、子どもたちに主体的な学びの責任を委ねるという考え方のなです¹⁹⁾。

簡単に言えば、「子どもたちが夢中になって言葉を操り、言葉を使うことを通じて言葉を学んでいく環境」をつくることで、学習者が自ら「書く力」を伸ばしていくような学び方を指している。そこでは教師はあくまで「枠組みを作る」役割を担い、一方、学習者は、その枠組みの中で多様な選択を行うことができるというのが、ライティング・ワークショップの特徴である。

先にも述べたように、このような指導を必要とする背景には、フレッチャー等が「書くこと」を単純なスキルとは見なしていないことと深く関わっている。前項で筆者も述べたように、「書くこと」を単純なスキルとして捉えるのではなく、より総合的なものとして捉えた場合、「書くことの指導」においては、より継続的で計画された「環境」が重要な意味をもってくる。それぞれのスキルを一つずつ知識として教えても、学習者がそれを具体的な場面で使えるようになる訳ではないからである。またフレッチャー等は、「年間を通して、毎回1時間前後のワークショップを少なくとも週3日は確保してください」²⁰⁾ と述べ、活動が繰り返し継続的に行うべきことを強調している。

また、ワークショップを行う上で、フレッチャー等は、子どもたちが「自分で選択すること」の重要性も説いている²¹⁾。すなわち、学びとは本来、「自分自身のために」行うものであり、そのような学びが成立する場において、子どもたちは最も夢中になって取り組むことができると彼らが考えているからである。4や5でも述べたように、今回の活動においては、筆者自身、ウェブサイト作成について十分な知識を有していた訳ではなく、ある意味、手探り状態で進めてきた活動であった。しかし、そのことが逆に、

学生たちの主体性を発揮させる呼び水となっていた点もあったかもしれない。というより、そもそもウェブサイトにおける表現は、まだ未成熟な部分があり、これといった正解がないという点も考慮に入れる必要がある。いずれにせよ、ウェブサイトや「鳥取」という「枠組み」はあったものの、学生たちはあくまで、自分の興味に基づいて記事を作成し、自分たちでよりよい方法を模索していった。このような状況によって、ウェブサイト作成がより「ワークショップ的な」活動になり得ていたと考えることもできる。

ライティング・ワークショップは、基本的に小学生への指導を念頭に置いており、その理論をそのまま大学生等に当てはめるのは適切ではないかもしれない。しかし、「書く」という複雑なスキルを身につける上で、「書くこと」を主体的に行うことができる場を設け、それを継続的に運営していくことが、書き手の養成において、重要な意味をもつという点では、大学生も小学生も共通する部分が大いように思われる。このように見ていくと、ウェブサイト作成という活動には、「書く力」を育てるための継続的なワークショップを行うためのプラットフォームとなりうる可能性があると考えられる。

(3) 「一・五次的ことば」を育てる場として

最後に、ウェブサイト作成が学生の「書く力」にどのような影響を与えたのかについて、言語発達という観点から、仮説的に論じてみたい。

発達心理学者の岡本夏木が、子どもの言語発達を「一次的事ことば」から「二次的事ことば」への質的転換として捉えたことは、周知の事実である。即ち、幼児期までの子どもは「特定の親しい人」を相手にした「一対一」の関係の中で用いられる「一次的事ことば」の世界に生きているが、学齢期に入って以降は、「不特定多数」の人々を相手にした「一対多」の関係の中で用いられる「二次的事ことば」の習得に迫られることになるという²²⁾。近年の「小一プロブレム」(小学校一年生の学校不適応)などを考える上でも、極めて示唆に富んだ理論である。

ところで、今回の学生達とともに作成したウェブサイトにおける言語は、「不特定多数」に向けられて発信されているものであり、その点においては、当然「二次的事ことば」であると言える。しかし、今回のウェブサイトの場合、確かに「不特定多数」に開かれているものの、それは単純に「全世界」に開かれているという訳ではなかった。というのも、当初、当サイトの読者については、執筆に携わっている学生同士や教員、更には彼等の周囲にいる比較的親しい人間が想定されていた。執筆が進むにつれて、より広い読者を獲得しつつあることを学生自身も意識せざるを得なかったものの、基本的な「文体」は大きく変わっていない。結果として、全ての人に分かる訳ではないが、「鳥取に興味をもっている人」や「自分たちの近い人」さらには、「継続的に読んでくれてサイトの文脈を理解してくれる人」に向けた文体が作られていった。

これは、既に何度か述べてきたように、当初からウェブサイト作成するにあたって、自身の生活や地域コミュニティを強く意識してきたことが影響している可能性が高い。このような個々の書き手の「個性」を感じさせる文体が、中規模のコミュニティの中にいるもの同士を繋ぐ上で効果的であるという点については、既に3で指摘した通りである。更に付け加えるならば、このような「文体」は「(おもしろ)読み物サイト」特有のものとも考えられる。先に紹介したデイリーポータルZでは、記事投稿を希望するライターに対して、「具体的には自分の両親に説明する気持ちで書いてください」と説明している²³⁾。人の興味を引くためには、ただ詳しく説明すれば良いというのではなく、より近い相手を想定して説明するような文体が、必然的に求められるということなのかもしれない。

ここから言えることは、ウェブサイト作成を通じて学生たちが獲得した文体は、論文を書くようなタイプの「二次的事ことば」ではなく、かといって完全に「一対一」の関係に基づく「一次的事ことば」でもない、「一・五次的ことば」ではないかということである。そして、大学生たちの文章作成能力向上に関わる指導は、多くの場合、論文作成等に特化した「二次的事ことば」への指導に重点が置かれるが、それが果たして適切なのかを問う必要がある。というのも、過剰な「二次的事ことば」偏重は、結果として「ことばの空虚化」を生み出し、却って「書く力」を後退させるような結果をもたらす可能性を否定できないからである²⁴⁾。本論文の冒頭において、現在行われている大学生への論文作成に関するプログラムに対して、筆者が若干懐疑的な姿勢を見せたのも、この点に起因している。

一方、今回行ったようなウェブサイト作成による文章作成指導は、直ちに学生達の論文作成能力に直結するものではないかもしれない。しかしそのような「二次的事ことば」の指導でないからこそ、より総合的かつ基盤的な「書く力」を育てるトレーニングになる可能性を秘めていると筆者自身は考えている。

結びにかえて

紙幅の都合で十分に論じられなかったが、今回のウェブサイト作成活動が当事者の想像以上に効果を上げた背景には、学生自身が、この活動を「自分たちのもの」として捉え、主体的に取り組んでいったということがある。7で紹介したライティング・ワークショップにおいても「自分たちが選択する」ことの重要性が指摘されているが、継続的な活動を行う上では、特にその点は重要であろう。

今回作成したウェブサイトについては、特別な事情がなければ今後も継続していく予定であるが、ライターとなる学生が入れ替わる中で、参加する学生に上記のような「当事者性」をもたせることができるかどうか、新たな課題として考えられる。ウェブサイトが所与のものであり、自

分たちの意思とは関係なく課題として示されてしまった場合、今回と同様の効果を望むことは難しい。参加者の「当事者性」を損ねることなく、継続していく仕組みをどのように作っていくかが今後の課題である。（了）

（注）

1) 佐渡島紗織「書くこと（作文）の教育の比較教育学的研究に関する成果と展望」、全国大学国語教育学会『国語教育学的研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、2013年、139頁。

2) 例えば、2014年12月に出された中央教育審議会答申では、大学入試センター試験を廃止し、記述式問題を含む「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入の理由について、次のように述べている。

一方で、大学入試センター試験は「知識・技能」を問う問題が中心となっており、これからの大学入学者選抜において評価すべき「確かな学力」の在り方や、下記（2）に示す、高等学校段階の基礎学力を評価する新テストの導入なども踏まえると、「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価するものにしていくことが必要である。（中教審第177号14頁。）

3) 例えば、国語科教育に携わる立場から、近年のメディア環境の変容について論じた研究として、宗我部義則「ソーシャル・ネットワーク・サービスがもたらしつつある変化と国語科教育の接点を探って—Facebookとtwitterを中心に—」（横浜国立大学国語教育研究室編『横浜国大国語教育研究』第35号、2011年10月）を挙げることができる。また、このようなメディア環境の変化を踏まえた近年の実践を紹介した研究として上田祐二「インターネットを扱った授業実践—ネット・コミュニティ・コミュニケーションへの参加に向けて—」（浜本純逸監修・奥泉香編『メディアリテラシーの教育 理論と実践の歩み』溪水社、2015年）がある。

4) この活動の詳細については、小笠原拓「『ブッククラブ』形式で行う読書指導の可能性」（地域教育学研究、第7巻、2015年3月）を参照。

5)、ニフティ株式会社によって運営されるウェブサイト。

<http://portal.nifty.com/>

6) デイリーポータルZ編集部「デイリーポータルZとは」

<http://portal.nifty.com/about/>

7) 有限責任事業組合 DEEokinawa LLP が運営。沖縄をテーマとしたサイト。

<http://www.dee-okinawa.com/>

8) 長崎在住のシステムエンジニア T・齋藤氏が運営する長崎を紹介するウェブサイト。

<http://www.nagasaki.web-saito.net/>

9) 株式会社アイ・ティ・エーが運営する横浜をテーマとしたウェブサイト。<http://hamarepo.com/>

10) 株式会社大和・アクタス Concent 事業部が運営する高円寺をテーマとしたウェブサイト。

<http://concent--c.jp/>

11) 東京農業大学による人材育成プログラム「多摩川源流大学」の活動に関する広報活動を行っているウェブサイト。

<http://genryudaigaku.com/>

12) 宮林 茂幸「『多摩川源流大学』が開校」

<http://www.nodai.ac.jp/teacher/100569/2009/3.html>

（東京農業大学HP、東京農業大学編『実学ジャーナル』2007年7+8月号より転載。）

13) このプレゼンは、現在、以下のような記事として、後の紹介するウェブサイト上に公開されている。

「『鳥取いろは歌』をつくろう!! (So. 門脇)」

<http://tottori.myserver.ne.jp/id-2/so-3/>

14) <http://tottori.myserver.ne.jp/>

15) 「聖なる夜に唐揚げを（宮田 ♪なるのぶ）」

<http://tottori.myserver.ne.jp/id-2/id-14.html>

16) 「誰もが知っているあの植物を食べてみる! ?（宮田 ♪なるのぶ）」

<http://tottori.myserver.ne.jp/id-7.html>

17) 門脇蒼「（卒業論文）『書くこと』の指導におけるインターネット・メディアの利用に関する研究」2016年2月1日提出、10頁。

18) ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルビ著（小坂敦子・吉田新一郎訳）『ライティング・ワークショップ』新評論、2007年、13頁。

19) 同前、19頁。

20) 同前、20頁。

21) 同前、22頁。

22) 岡本夏木『ことばと発達』岩波新書、1985年。

23) デイリーポータルZ編集部「募集」

<http://portal.nifty.com/writer/boshu.htm>

24) 例えば、前述の岡本夏木は、現代の社会情勢がもつ二次的ことばの過度な期待が「ことばの疎外」をもたらしているとして、次のように述べている。

一次的ことばとそれを支える表象は、子どもの生活に根をおろしている。二次的ことばとその表象は、そうした生活の文脈を離脱したところで形成されたのであるが、それが自己の行動と思考の体制の中で、生きた力をもって機能しうるのは、それが一次的ことばを媒介として生活的な基盤につながりえているからである。しかし二次的ことばの肥大化は、自らが生命の基盤とした一次的ことばを併呑し、二次的ことば自体の形骸化をもたらす危険をはらむ。（前掲、『ことばと発達』163頁。）